

平成 21 年 5 月 21 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19820013
 研究課題名（和文） 懐徳堂の「知」の生産—儒学を中心とした知識人の繋がり
 研究課題名（英文） Production of “Wisdom” of Kaitokudo—Connection of intellect who centers on Confucianism
 研究代表者
 池田 光子（IKEDA MITSUKO）
 大阪大学・文学研究科・助教
 研究者番号：10452400

研究成果の概要：本研究は、近世期に隆盛をほこった懐徳堂を対象とし、その思想的特徴について、《資料調査》《思想研究》の二方面から検討を行ったものである。主な成果として、《資料研究》では、懐徳堂を代表する儒者の一人である中井履軒の『中庸逢原』を、翻刻・データベース化し、《思想研究》では、養生思想に関する履軒の著作を検討し、儒学・医学に通底した実学主義の学問姿勢を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,210,000	0	1,210,000
2008 年度	1,090,000	327,000	1,417,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	327,000	2,627,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：懐徳堂，近世儒学，中井履軒

1. 研究開始当初の背景

江戸期儒学の研究は、江戸と京都とを中心に論じたものが、ほとんどである。両所が重要視されるのは、荻生徂徠・伊藤仁斎といった大儒が存在していたことに加え、政治的に重要地点であったことが理由として考えられる。しかし、重要地点を挙げるならば、「天下の台所」である大坂も加えるべき地域と言える。

大坂には、近世期に江戸の昌平黌と並び称された学問所である懐徳堂が存在していた。懐徳堂は、明治二年には閉校となるが、近世期においては、官許学問所として隆盛を誇っていた。つまり、近世儒学を考える上で、懐

徳堂の存在は外すことができないと言える。よって、本研究では、近世儒学研究の一環として、懐徳堂を研究対象の中心に据え、なかでも懐徳堂を代表する儒者の一人である中井履軒の思想的特徴について検討を行った。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、懐徳堂に見られる学問的特質について、中井履軒（1732～1817）の思想的特徴の検討を通し、明らかにすることを目的とした研究である。

懐徳堂の儒学については、先行研究として陶徳民『懐徳堂朱子学の研究』（大阪大

学出版会、1994)がある。懐徳堂の創設期に助教を務めていた五井蘭洲(1697～1762)を中心とし、懐徳堂における朱子学の受容について論及した研究である。

懐徳堂創設期の経学思想の特徴を明らかにした点で、有意義な研究であるが、懐徳堂の黄金期を築いたとされる中井竹山(1730～1804)・履軒の思想的特徴について、十分な検討は行われていない。

この、竹山・履軒兄弟に焦点を絞った研究書としては、加地伸行編『中井竹山・中井履軒』(明德出版社、1980)がある。履軒の経書解釈の特徴について、『大学』『中庸』の注釈書(『大学雑議』『中庸逢原』)を用い、具体的な箇所を挙げて論じている。しかし、書物の構成が、竹山と履軒それぞれの思想的特徴の概要を提示することに重点をおいているため、特徴を数点挙げるのみに止まっている。

中井履軒は、懐徳堂の黄金期を築いた一人とされる人物であり、懐徳堂を代表する儒者である。よって、履軒の思想的特徴を明らかにすることは、懐徳堂の学問的特徴を明らかにすることに繋がると言えよう。そこで、履軒の思想的特徴を明らかにすることを目的とし、研究を行った。

(2) (1)に挙げたように、従来、懐徳堂の学問的特徴の研究が十分に行われなかった背景として、資料的制限が挙げられる。

懐徳堂関連資料の多くは、大阪大学附属図書館懐徳堂文庫に所蔵されている。目録としては、『懐徳堂文庫図書目録』(大阪大学、1976)があるが、昭和51年(1976)以降に寄贈された資料については、まとまった目録が作成されていない。つまり、懐徳堂関連資料の全容は明かになっていない状態である。

しかし、未調査資料の中に、懐徳堂先賢に関連する貴重資料が含まれていることは明白であり、懐徳堂研究を行う上で、資料の存在を明らかにすることは必要であると言える。よって、未調査資料について明らかにすることも、本研究の目的の一つとした。

以上、本研究では、懐徳堂の学問的特徴を明らかにするため、中井履軒を中心とした思想的特徴の抽出と、未調査の懐徳堂関連資料の調査とを目的として研究を進めた。

3. 研究の方法

2.で述べたように、懐徳堂の学問的特徴について研究するためには、思想面からだけでなく、資料調査の必要もある。そのため、本研究は、先行研究の成果を踏まえつつ、『資料研究』『思想研究』の二方面から研究を進

めた。

(1) 資料研究

資料の存在を明らかにすることは、『思想研究』を行う上でも必要である。そのため、『資料研究』を優先して行った。

① 懐徳堂関連資料の多くは、大阪大学附属図書館懐徳堂文庫に所蔵されている。なかでも、懐徳堂先賢に関する貴重資料のほとんどは、中井家の子孫の寄贈によるものである。

資料は一時に寄贈されたわけではなく、数回に分けて行われた。その中には、2.

(2)で述べたように、昭和51年以降に寄贈された資料群もあり、未だに調査・目録作成が行われていない資料が存在している。

懐徳堂と深い関係があった中井家が保持していた資料であることから、貴重資料が多く含まれている可能性が高く、その内容を明らかにする必要性が高いと感じられた。そのため、これらの資料について、データの作成を行った。

② また、懐徳堂文庫以外に所蔵されている関連資料についても、調査の必要性が生じた。特に、本研究で検討対象の中心とする中井履軒の講義録とされる資料が、国立国会図書館に所蔵されていたため、履軒の講義録であるかの検討を含め、調査を行った。

(2) 思想研究

中井履軒は、懐徳堂の黄金期を築いた一人とされる人物であり、懐徳堂を代表する儒者である。よって、履軒の思想的特徴を明らかにすることは、懐徳堂の学問的特徴を明らかにすることに繋がると考え、研究を進めた。

具体的には、本研究の現在までの研究で明らかにした、履軒の経書注釈書に見られる思想的特徴を基とし、医学の分野における著作についても、検討を行った。

本研究を進めるにあたっては、医学の分野における著作であることから、どのような知識人たちと交流を持っていたのか、また、儒者でありながら、医学へも視点を向けたという姿勢が、思想史的にどのような意味を持つのか、という点についても留意しつつ研究を進めた。

なお、後者については、類似した立場で養生について説き、履軒とほぼ同時代に活躍した貝原益軒(1630～1714)と比較対照することで、研究を進めた。

4. 研究成果

本研究は、3.で述べたように、『資料研究』『思想研究』の二方面から研究を行った。以下、それぞれに分けて報告する。

(1) 資料研究

- ① 懐徳堂文庫の未調査資料については、大阪大学附属図書館に所蔵されている中でも、「第二次新田文庫」と呼称される資料群について調査を進めた。

「新田文庫」とは、中井家の子孫である中井木菟麻呂(1855～1934)が、亡くなるまで手元に保存しておいた資料群であり、木菟麻呂の子孫にあたる新田和子が、木菟麻呂の死後、大阪大学に寄贈したものである。寄贈は二回に分けて行われ、一回目は「第一次新田文庫」、二回目は「第二次新田文庫」と称される。

「第一次新田文庫」については、本研究者の今までの研究で、目録や資料報告などを行っているが、「第二次新田文庫」については、未着手であった。「第一次新田文庫」の調査を行った際、多くの貴重資料を発見することになったため、「第二次新田文庫」についても同様のことが想定された。よって、どのような思慮が含まれているかについて調査およびデータベースの作成を行った。

本研究期間内では、紙面の発表にまで至らなかったが、資料の寄贈がされた時期に近い段階で作成されたカード類を参照しつつ、資料の一部についてデータを作成した。

今後は、更に詳細な目録を作成し、紙面だけではなく、多数の研究者に提供できるよう、インターネット上への発表を考えている。

- ② 懐徳堂文庫以外に所蔵されている資料の調査として、国立国会図書館蔵『中庸聞書』の研究を行った。

『中庸』は、懐徳堂の初代学主である三宅石庵が「中庸錯簡説」(『中庸』第十六章を第二十四章の後ろにおくべきとする説)を提唱しており、この説は懐徳堂の中で代々受け継がれ、現代の『中庸』研究にも影響を与えている。履軒もこの説を受容するとともに更に独自の説を加えて新たな章立てを行い、『中庸逢原』を作成した。

『中庸聞書』は、履軒の講義録とされる書物である。講義者が履軒であることが確かならば、厭世家とされる履軒が、受講生に向けてどのような講義を行っていたのかを伺うことが可能となり、履軒の思想的特徴を明らかにするだけではなく、懐徳堂の授業内容を明らかにすることにも繋がる貴重資料である。

『中庸逢原』との比較対照、および、『近世先哲叢談』に記された交流関係などから検討した結果、履軒の講義録ではないことが判明した。しかし、「中庸錯簡説」の影響、つまり、懐徳堂の学問の影響を受けて

いる人物が講義者であることが明らかになった。加えて、思想的特徴として、鬼神や人鬼の存在を完全に否定する無鬼論が展開されていることが確認できた。

以上の結果から、『中庸聞書』の講義者は、懐徳堂最後の教授である並河寒泉(1797～1879)の可能性が高いことを指摘した。

この結論は、国立国会図書館に所蔵されている他の懐徳堂関連資料の再調査を行うべきことを示唆しているとともに、懐徳堂創設期から、閉校に至るまでの懐徳堂の「知」の伝達について、研究を行うことが可能であることを明らかにしたと言える。

- ③ ②に関連した研究である。中井履軒の『中庸逢原』の思想的特徴を検討するにあたり、『中庸逢原』は現在入手が困難であること、また、履軒が注を作成する上で批判対象としていた朱子の『中庸章句』が『中庸逢原』には記載されていないことなどから、朱子の注を併記した『中庸逢原』を翻刻した。

なお、この成果については、紙面で発表するとともに、その一部についてデータベース化し、インターネット上に発表した。

(2) 思想研究

中井履軒は、膨大な量の経書注釈書を作成している。西村天囚が『懐徳堂考』(1910)の中で「独見」と評しているように、そこには朱子学を批判的に受容した、独自の見解が多く見られる。本研究者も、今までの研究において、履軒の経書注釈書である『孟子逢原』『論語逢原』を中心に、履軒の思想的特徴について研究を進めてきた。

履軒は、経書注釈書だけではなく、自然科学の分野についても数多くの著作をのこしている。これらの資料の検討については、従来の研究において、儒者としての履軒の思想的特徴については検討に加えず、研究が行われてきた。

しかし、履軒が活躍した時代は「儒医」についての議論が盛んに行われた時代である。儒者でありながら、医学に関する資料も数冊著している履軒が、儒学と医学とをどのような立場で捉えていたのかを明らかにすることは、履軒の思想的特徴を明らかにするだけではなく、近世思想史においても重要なことと考えられる。

よって、「養生」について説いた書物である『老婆心』の検討を行った。また、検討を行う際、類似の立場で養生について説いた貝原益軒の『養生訓』と比較対照することで、『老婆心』に見られる思想的特徴について研究を行った。

結果として、益軒が、儒者の立場から『易』

の理論や『孝経』の言葉を用い、形而上的な概念を多用しつつ、養生を説いているのに対し、履軒は儒学に関する言葉を用いず、体の内部の仕組みを詳細に解説することで、養生を説いていたことが判明した。

これは、先行研究で、益軒が実学主義の思想から養生を説いている、とされるのに対し、履軒の方がより実学主義の立場から養生を説いていた儒者であることを示している。

また、このような履軒の学問姿勢は、医学の方面だけではなく、経書解釈にも見られた姿勢である。つまり、儒・医という学問分野を異にするも、その学問姿勢は通底していることが明らかになった。

このように、履軒が身体の内面について、具体的な説を提示することができたのは、天文学・医学の方面で著名な麻田剛立との交流があり、剛立の代わりに『越俎弄筆』という人体解剖図を作成した経験が背景に存在すると考えられる。

以上の研究成果については、日本語だけではなく、中国語でも口頭・紙面発表を行った。

本研究は、以上の《資料研究》《思想研究》の二方面から行った。

懐徳堂関連資料のなかでも未調査となっている資料の一部を明らかにすることは、今後の懐徳堂研究を行う上で必要なことと言えよう。また、懐徳堂文庫以外に所蔵されている関連資料を再検討することは、その資料の研究価値を位置づけることにも繋がり、今後の研究において必要なことと言える。

また、近世思想史を研究する上で、懐徳堂の学問的特徴を踏まえることが必要であることは、懐徳堂を代表する儒者の一人である中井履軒の思想的特徴を確認することで明らかになった。

履軒の経書解釈は、確かに「独見」である。それは、形而上学的な儒学という学問に対して、実学主義の姿勢で取り組んでいることにも表われている。更に、本研究で明らかになったように、その学問姿勢が、他の学問分野の著作にも表われていることは、当時の知識の担い手であった儒者が、他の学問についてどのような姿勢であったのかを示した一例であり、近世儒学史上、注目すべき点である。また、学問の担い手が儒学から蘭学へと変容していく過渡期の儒者の様相を表わしているとも言えよう。

今後は、本研究の成果を踏まえ、未着手の《資料研究》を進めていくとともに、《思想研究》の方面では、履軒の思想的特徴を更に検討することと併せ、知識人たちの交流から生じた思想的影響についても、より詳細な調査を行い、懐徳堂という場所・学問が果たした文化的役割について研究を進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 池田光子、中井履軒『中庸逢原』解説及び翻刻 附集注、大阪大学大学院文学研究科紀要、49巻、pp39-109、2009、査読有
- ② 池田光子、養生思想の転換点—中井履軒『老婆心』の周辺—、懐徳、77号、pp35-47、2009、査読有
- ③ 池田光子、養生思想的転折点—中井履軒《老婆心》的周辺—、国際学術研究会—東アジア文化の発生・変遷・交流—予稿集、pp1-11、2008、査読有

〔学会発表〕(計1件)

- ① 池田光子、養生思想的転折点—中井履軒《老婆心》的周辺—、国際学術研究会—東アジア文化の発生・変遷・交流—、2008年10月25日、致遠管理学院(台湾)

〔図書〕(計1件)

- ① 湯浅邦弘、佐野大介、黒田秀教、池田光子、大阪大学出版会、江戸時代の親孝行、2009、pp197-216

〔その他〕

ホームページ等

<http://kaitokudo.jp/navi/index.html> (懐徳堂四書—『中庸』編—) ※研究成果に基づく、データベース作成。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 光子 (IKEDA MITSUKO)
大阪大学・文学研究科・助教
研究者番号：10452400

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし